

いわて児童館テキスト
vol. 1
平成18年3月発行



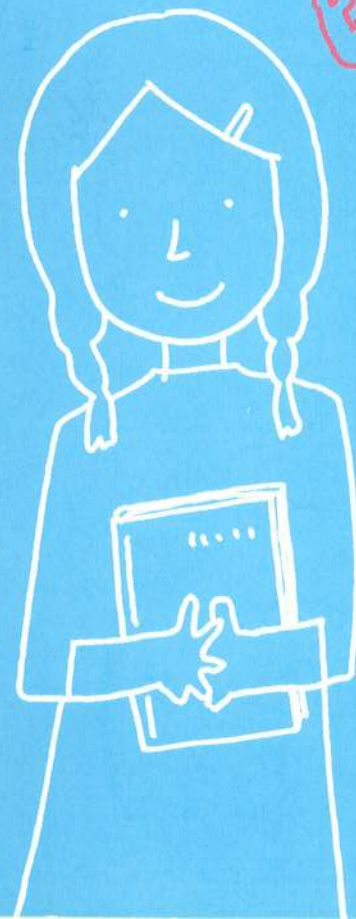
いわて児童館 テキスト vol.1



健全育って
なあに？



児童館って
どんなところ？



I 児童健全育成ってなあに
 1) 豊かな子育てと地域支援の必要性 1
 2) こども観ってなあに? 2
 3) 子どもの第3の居場所になるために 3

II 児童館ってどんなところなの
 1) 法的根拠を知っておこう 4
 2) 児童館ってただ子どもを遊ばせるところなの? 5
 3) 児童厚生員に求められること 5

III 毎日どんなことやっているの
 1) 子どもの森の場合 8
 2) 盛岡市立河北児童センターの場合 9

IV どんな遊びをしようかな
 1) 子どもの森の考え方 10
 2) 子どもには見えないこんな意図、あんなねらい
 ①心とからだを解き放つ「劇あそび」 12
 ②心とからだを解き放つ「わらべうたであそぼ」 15
 ③アートとコミュニケーション「世界でひとつの万華鏡づくり」 18
 3) 遊びのヒント集
 ①のぼるくん 21
 ②ブーメラン 22
 ③ヒューヒューふえ 23
 ④パクパク人形 24
 ⑤まわるくん 25
 ⑥くるくるとり 26
 ⑦和の心 27
 ⑧1コマ劇場 28
 ⑨パースティチェーン 29
 ⑩叫んで同じ仲間づくり 30
 ⑪川の岸の水車 31

V 付録
 いわて子どもの森ワークショップ鉄則10 32

VI あとがき 33

I 児童健全育成ってなあに

豊かな子育てってなあに?

1) 豊かな子育てと地域支援の必要性

子育てのことじゃないの、とよく聞かれたりしますが、ここ子どもの森では、子ども自身がものごとに出会ったときに何をどうするか、先が見えなくても子ども自身が何を選んで前に踏み出すかを最も大切にしています。「生きる力」の源には、理屈めきで、〇〇〇が大好き! という子ども自身の実感が含まれています(それぞれの大好きはみな同じではないですよ)。こうした意味を含めて、あえて「子育て」ということばを使っているのです。

子育てとは、自らが生きようとする力であり、それは自身が伸びようとする選択的、主体的な力にほかなりません。子どもの内側からあふれ出す感情や感覚を、のびのびと外に開放する中で、肯定的な感情を育ててほしいと思うのです。



なぜ、いま、地域支援が必要なの?

かつて私たちが子どもだった頃、地域の中には原っぱや空き地がどこにもありました。山や川や田畑で遊びをおぼえました。でも今になって思うと、どこかで必ずおとなの眼差しが子どもたちを守ってくれていた!。「あぶねえぞ」「なにやってんだ」と怒られたこともたびたび。そうやって話しかけてくるおせっかいなおじさんやおばさんがいたのです。地域社会の支えがあつてこそ、子どもたちは、ケンカのやり方も仲直りの仕方、ルールも、おとなのだからしないところもステキなところも、みんなみんな学んだのです。

地域の教育力がいま、弱体化しています。人と人のつながりをまだ色濃く残す岩手でも、共同体が壊れてきて、家族の孤立化が進んでいることは抗えない事実です。子どものいじめ、不登校、ひきこもり問題など、子どもを取り巻く環境が大きく変容する中で、地域の再生がどうすれば図れるのか。子どもの地域教育を活発なものへと変えていくために、地域の中の子どもに関わる児童館が、人と人の「つなぎ手」となること。地域の中で断ち切れた関係をつなぎ直す役割が求められているのです。児童厚生員のみなさん、ここはひとつ、現代のおせっかいなおじさん、おばさん(お兄さん、お姉さん)になろうじゃありませんか。

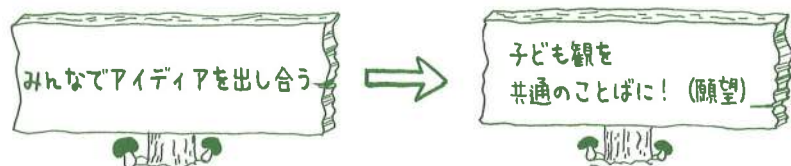


2)子ども観ってなあに？

私たちが「子ども観」をもつことの意味

聞きなれないことばとお感じになるかもしれませんが、要は、どういう子どもに育ってほしいかということ。児童館は学校とは違うのだから、いわゆるよい子の養成に取り組む必要はないですね。つまり、「評価をしないところ」ということだけははっきりと肝に銘じておかなければならないと思うのです。学校は評価をするところ、これは悪い意味ではなくてそうでないと学校たり得ない。でも、児童館は同じじゃあないはず。ほっと息抜ける子どもたちの居場所なのです。

みなさんの児童館ではどんな子どもたちに育ってほしいですか。



子どもの森の場合「のんびり、ゆっくり、ぼけーっとしようよ」というメッセージに凝縮

絵本作家の五味太郎さんが、ふたつのよい子像についてとても面白い言い方をしているので以下に引用してみます。児童館でいうよい子ってどっち？

大人の言うことは素直にきいて、決められたことはきちんと守り、出された問題にはうまく答え、与えられた仕事はだまってやる。
決してさぼったり、ごまかしたりはしない。
それが「かしこい頭とじょうぶな体」のよい子です。

言われたことの意味をたしかめ、決められたことの内容を考え、必要があれば問題をとき、自分のために楽しい仕事をさがし出し、やるときはやるし、さぼりたいときはすぐさぼる。
これが「じょうぶな頭とかしこい体」を持った、これもまたよい子です

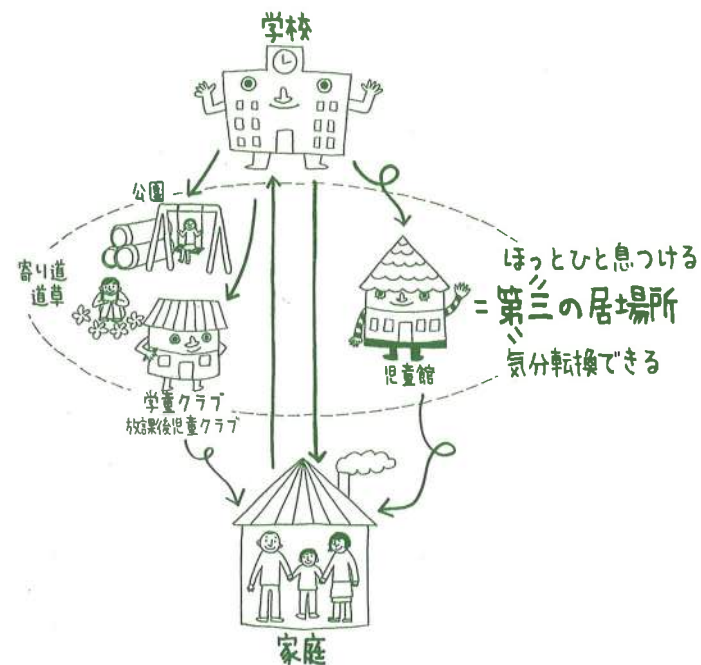
引用：五味太郎著 「じょうぶな頭とかしこい体になるために」

3)子どもの第3の居場所になるために

児童館＝第3の居場所づくりは、今後ますます重要な存在になります。

近年、子どもに関わる不幸な事件が相次ぐ中で、地域の中での安全・安心な子どもの遊び場、居場所をどう確保するかが問題となっています。

第1の居場所は、家庭。そして第2は学校。その中間的存在として、親の目や先生の目にもふれない、仲間と遊んだり語り合ったりできる自由なたまり場として、児童館や放課後児童クラブ、学童クラブの存在が、いかに重要なものなのか。それは先述したとおり、子どもが心やからだを解放できる場所として、かつて存在した地域の中の山や川や田畑、原っぱなどが果たした役割と近いものがあるからなのです。



児童館＝子どもたちが心とからだを開放できる場。あたたかい居場所
・ なによりも居心地の良い
・ いつまでもそこにいたくなる
・ 何度でもまた来たくなる

II 児童館ってどんなところなの

1) 法的根拠を知っておこう

児童館とは、「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする施設」として、児童福祉法（昭和22年12月12日法律第164号）第40条に規定されています。

そもそも児童福祉法の目的は、「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない」ことを規定し（同第1条）、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」としていません（同第2条）。

ここでいう児童とは1歳未満の乳児から18歳未満の少年までを指し（同法第4条）、児童館は児童福祉施設の一つとして位置づけられています（同法第7条）。

また、児童館における遊びは、児童福祉施設最低基準（昭和23年12月29日厚生省令第63号）第39条において、児童の自主性、社会性及び創造性を高めるものであるよう定められています。

規定をみれば、0才～18才までの子どもを対象に、地域の中で子どもの健全育成に関する総合的機能を有する施設であることが、児童館の本質であるとわかります。

（児童館も保育型、健全育成型があるので、機能的に若干異なる部分もあります）

戦後の創生期にあって、すでに子どもたちの「自主性」、「社会性」、「創造性」を高めることが謳われていた事実、私たちは今まさに注目してみる必要があるのです。

【参考データ：全国の児童館】

厚生労働省「社会福祉施設等調査報告」参照

[設置状況] 4,673箇所（平成15年10月1日現在）
うち岩手県内 134箇所（平成17年4月1日現在）

[運営主体別数]
公営 3,210箇所 民営 1,463箇所

[施設種別数]
小型児童館 2,870箇所 児童センター 1,643箇所
大型児童館 22箇所 その他の児童館 139箇所

[実施主体]
都道府県、指定都市、市町村、社会福祉法人等

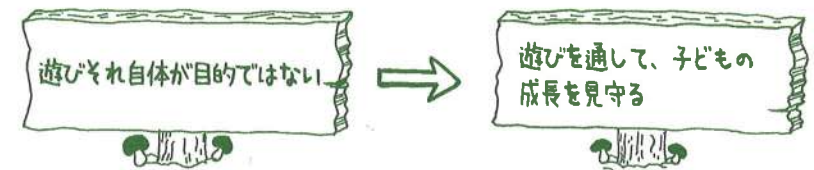
2) 児童館ってただ子どもを遊ばせるところなの？

「子どもをただで遊ばせてくれるだけの場所なんじゃないの」「遊んでただでいいですね」と思ってる方がいるとすれば、それは誤解です。児童館の設立目的は、遊びを通して子どもの育成、つまり心とからだのすこやかな発達をサポートすることにあります。遊びはあくまでツールであり、方法に過ぎません。その背景となる目的も意図もあるのです。

（子どもたちにそれがわかってしまったらネタバレですね）

IV. どんな遊びをしようかな参照

どうすれば、子どもたちがいきいきと自分を開放でき、友だちといっしょに楽しく遊ぶことが出来るのか。そういう環境を保障し、子どもをサポートする場所が児童館なのです。子どもたちを取りまくおとなの方々、お父さんお母さんや学校の先生方に、私たちの意図を具体的な活動を通してわかりやすく説明して理解を得ることも必要です。

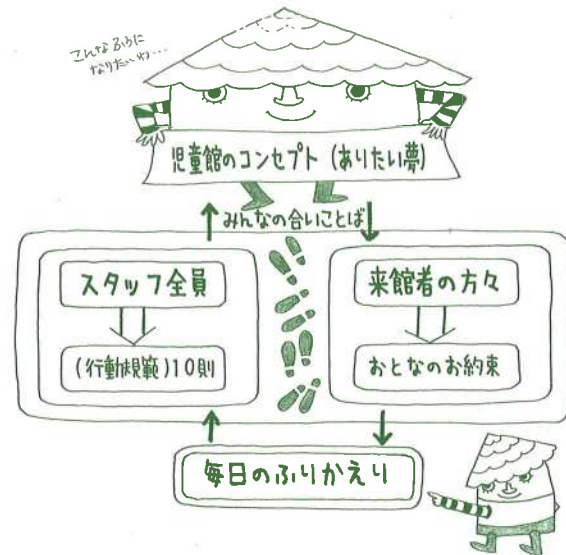


3) 児童厚生員に求められること

児童館には、通常、館長、主任児童厚生員とともに、児童厚生員と呼ばれる子どもの遊びをサポートする専門スタッフがいます。子どもの森では、プレーリーダーと呼んでいます。次頁に掲げたのは、子どもの森で実際使っている「子どもの森10則」（行動指針）です。どんなことを大事にして毎日の日常を子どもたちと関わっていくのかを、私たちは実際に言葉にして掲げています。迷ったときに振り返る原点となる指針は、どの児童館にとっても大切なものです。あなたの児童館でも自分たちの10則を創って掲げてみてはどうですか？

いわて子どもの森 10則

- 朝の第一声から仕事が始まります。気持ちよく、元気に入ってください。
(自分の気持ちの持ち方ひとつで、ひとの印象は大きく変わります)
- しぜんに生まれる私たちの笑顔が子どもの森の原点です。
(つくり笑顔ではなく、自分の内側から湧いてくるもの)
- 意識して自分が思うよりも一歩前に。お客様に近い距離で対応しよう。
受け答えは、大きく、明るく、ていねいに。想像以上に声は人をあわします。
(電話対応、受付対応、遊具対応、ぜんぶ)
- すべてのサービスの受け手は、こどもたちであることを忘れずに。
(おとなではない。肩書きではない。理屈ではない。)
- わかったつもりでも、念には念を。コミュニケーションは密に取り合おう。
(何度でも繰り返し、直接、当事者同士でことばで確認を。文字でのメモも)
- ここは変わり続けていくミュージアムです。私たちのまなびや成長がなければ館の成長もあり得ません。
- 失敗は成功のもと。完璧を求めず、失敗の中から小さな成功を積み上げていこう。
(頭ではわかっているつもりでも、意外にかたちに縛られているものです)
- 子どもの森は「健全育成」を通して、「子どもたちの生きる力」を育む児童館です。
すべてのプログラムにはそのための意図や狙いがあります。
そこが遊園地との根本的な違いだと心してください。
- ユニフォームを着たら、派遣も、ボランティアも、お掃除の仕事も、レストランの仕事も、みんな同じ子どもの森のサービス・スタッフとして見られています。全員で支えあっています。
- 常に、どんな時でも好奇心を忘れないこと。あきらめないこと。これがすべてです。
結果はあとからついてきます。



いわて子どもの森 みんなの合いことば

- ・事故は自分の責任。自分の判断で自由にあそぼう (自由にあそんでももらうために、できるだけ制約を加えないことにしています)
- ・ごみは出さずに自分で持ち帰ろう
- ・わからないことはスタッフのお兄さん、お姉さんにどんどん聞こう

いわて子どもの森 おとなのお約束

- ・まず、子どもの話に耳を傾けること
- ・早くしなさいと、むやみにせかささないこと
- ・あぶないからやめなさいという前に、本当にそうかよく考えること
- ・服を汚してもおこらないこと

III 毎日どんなことやっているの

1) 子どもの森の場合（土曜、日曜）

サービスの質に
こだわる

毎日やります！

8:30 朝のミーティング
スタッフ全員が顔を揃えて、今日の予定を確認。
お客様を迎え入れるだけのテンションが私たち
の中でできているか、その調整の場です。
(歌を唄ったり、ストレッチをやったり、ス
タッフのアイスブレイクも織りまぜています)



9:00 開館
正面玄関の黒板にイラストを描くプ
レーリーダーのふうちゃん。ほとんど日替わ
りで描いています！
(来館者へのメッセージを毎日どう伝え
るか。プレーリーダーにとっても、とて
もいいトレーニングになります。)



10:00~
ワークショップ
今日はおんちゃん和遠足だ



13:00~15:00
駄菓子屋さん登場
リヤカーで館内どこでも出没します。

15:00~16:30
まんてんハウスのお客様がチェックイン

17:00 閉館
お客様アンケート回収（私たち
のサービスを評価してくれる大
切なデータ）



17:15 夕方のミーティング
今日1日をみんなで振り返り確認。
よかったこと、悪かったことも共
有します。

その日に起きたことは
その日の内に解決を!!

2) 盛岡市立河北児童センターの場合

9:00 開館
土曜日や学校の長期休業中は
8:00から開館します。



午前中は主に2、3歳の子もたちが親と
一緒にやってきます。利用は無料です。

年間22回の幼児教室を午前中
に行っています。
子ども同士、母親同士のコミュ
ニケーションの場となっています。



12:00 児童厚生員が出勤します。
遊びに来る小学生の面倒を見るため、
18:00まで勤務します。

日曜日は9:00から18:00まで
開館していますが、児童厚生員は
お休みのため、保護者同伴の自己
責任で利用いただけます。

午後になると学校を終えた小学生がやっ
てきます。利用は無料です。
バドミントン、サッカー、一輪車、習字、
囲碁将棋など10の文化体育教室があり、
年会費500円で、複数かけ持ちもできま
す。

男子にはサッカーが、
女子には一輪車が
人気！

ドッジボール大会、もちつき大会など
桜城児童センターと合同で行うイベ
ントもあります。
イベントの企画運営には母親クラブの
サポートが欠かせません！



18:00閉館
子どもの利用は17:00（冬は16:30）
までですが、申し出があれば18:00まで
利用可能です。

センターは地域の大人たちのサー
クル活動にも利用できます。
(夜は最大21:00まで)

IV どんな遊びをしようかな

1) 子どもの森の考え方ープログラムデザインの背景ー

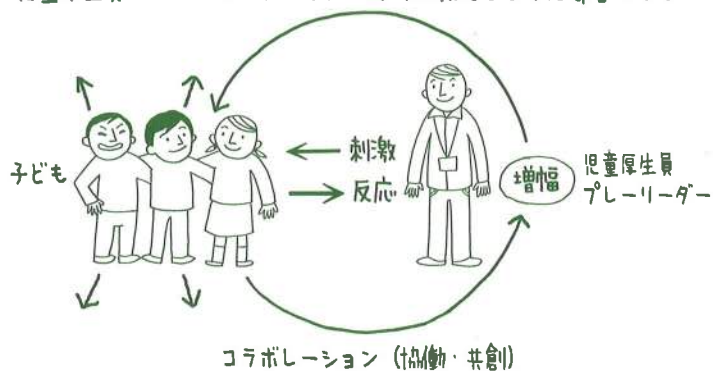
子どもの森で子どもたちを対象に行っているワークショップでは、「プログラム=全体の流れ」のことをいいます。プログラムを構成するひとつひとつの遊びは、「アクティビティ」と呼んで、これらがある意図、目的に沿うかたちでデザインされたものの集成を「プログラム」と呼んでいます。

子どもたちが心やからだの緊張や不安を解き放って、いきいきと自分の内側の感情や感覚、イメージが豊かに湧きあがってくる状況はどうしたら創り出せるのでしょうか。子どもたちとのコラボレーション（協働・協創）のプロセスから生まれてくる楽しさは、ミュージシャンのコンサートLIVEとよく似ています。相互によく響きあう関係が子どもたちとプレーリーダーとの間に成立できるかどうかにかかっているといってもいいかもしれません。

子どもの森の場合、限られた時間の中で行うプログラムである以上、個々のアクティビティの配列にテーマやイメージ上のつながりがないとうまく流れていきません。

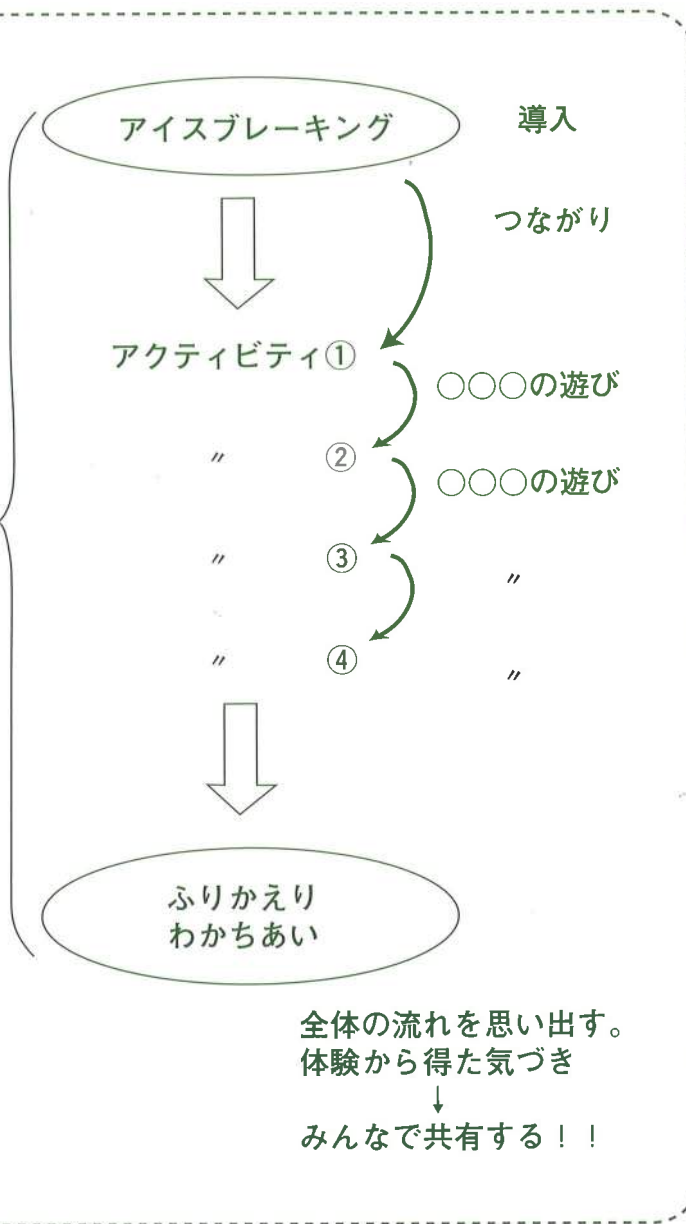
アイスブレイク（参加者の緊張や不安を氷に例えて、氷をこわすの意）として、小さなゲームを初めに導入として入れて、子どもたちの出会いや関係づくりを促がすことをよくやります。

児童厚生員・プレーリーダーは、一方的に教えさす指導者ではない



プログラム=全体の流れ

個々のアクティビティをつなげていくと、イメージが増幅し、楽しさが流れとなる。



2)子どもには見えないこんな意図、あんなねらい

① 心とからだを解き放つ 「劇あそび」になってみる、からだで表現する

意図：劇や詩の一説を利用して、からだまるごとの表現を通して、なにかになってみることでイメージと創造を広げ、何にでもなることができることに気づかせたい。

対象：小学生1年～6年
時間：2時間程度
準備物：
・「かしわばやし」の夜（宮澤賢治作）のコピー人数分
・肌さわりのよい布ややわらかいもの、鳴り物など。

進め方：

1. 子どもたちのからだと心の緊張もゆるめるために、以下のアイスブレイクを。

- ① プレーリーダー（PL）が合図をしたら、自由に歩き出す。自由にどの方向でもよい。合図をしたら、だんだん速く、ついには全力で。相手を擦り抜けるように。ピークまで行ったら、だんだん遅く。しまいにはスローモーションで。
⇒足の裏の踏んだ感じや手や足の重さを感じながらやること
- ② 二人一組になって、ひとりが相手の頭の上から冷たい水をかけてやる。（水浴びのように）もちろん、かけたつもり。かけられたつもり。⇒なったつもりで想像のディテールを描けばイメージを共有できる



2. 少しずつ、緊張がほぐれてきたところで、詩の一節の通りにからだで動く。

- ③ はじめに2つ(参加人数が多い時はさらにグループをふやす。)のグループ分けを。宮澤賢治の詩「烏百態」をPLが読む。これに合わせて片方のグループの子どもたち群が、ひとりひとり烏になりきって群れで動いてみる。
⇒片方のグループが観客となって見守ることによっていい意味での緊張感が生まれる
- ④ 今度は全員で。谷川俊太郎の詩「ゆっくりゆきちゃん」をPLが読む。これに合わせてひとりひとりのゆきちゃんが、朝歯を磨いて、パンを食べて、学校へ。
⇒最後にオチがあるので全員でいっぺんにやる。ゆっくりってどんな感じなんだろう。



3. さあここから本日のメインの劇作り。4つのグループ分け(各6～10名程度)をして、宮澤賢治「かしわ林の夜」のコピーを配って作業を説明。

- ・まず、童話は全部事前に読んでおく必要はないことを言う。ナレーター、各登場人物、情景描写の担当を決めてほしいということ。
- ・あとで(30分程度)グループごとに場面を演じて発表してもらうこと
⇒ここでのポイントは、光、水、お日様、風などの情景描写もからだで表現すること。布ややわらかいもの、鳴り物など用意しておくこと効果的。

4. 本番スタート。舞台を決めて客席位置にみんなで座って、順繰りに。

- ⇒全部本を読み込む時間がなくてここで初めて全体がつながったりします。本番は真剣に。舞台は一度きり！に賭ける気持ちで。
- ⇒グループごとに同じ配役でも人が変われば、声も動きもイメージも変わることを体感したい。(その場に流れている空気感は、次のグループにも引き継がれていく。)



5. 最後にふりかえりとわかちあいの時間を。

- ⇒グループごとでも、全体でやってもよい。参加者の感じ方を、評価せずに受け止めながら、多様な角度から光を当てるようにPLは心がけたい。



ここがポイント：

- ◎プログラムは、子どもたちそれぞれの緊張や抑圧を徐々にほぐしていくために、3つのパートで構成している。
- ◎からだで表現することに定式はない。自分が感じたものを大切にせず動いてみるのが大切。ともに支えあう役回りがある。
(こう動きなさい！このカタチで！と指導者が決め付けない。心理分析してからやろうとすると動けなくなることが多い)
- ◎何にでもなってみることができるということが劇づくりの一番の魅力。なってみると、ただ黙読した時とは異なる感覚やイメージ世界が生まれることを気づかせたい。